

土の匂い

先ごろ生まれて始めて田植えをしました。わが生家は畑作農家なものですから今までそのチャンスもなく、テレビなどの映像では稲の生長具合や出来高がその都度話題になり、見る事が多くても足を踏み入れることは有りませんでした。

追分町に仲間借りしている畑や水田があり、毎年野菜やそば、米を作らせてもらっています。地元の農家にすべて段取りをしてもらって作業をするのでらくちんな農作業ではありません。何と言っても仲間のグループ名は「遊農園」なのです…。作業しているよりその後の食事や酒宴に趣が置かれているのは言うまでもありません。自分の手を掛け収穫する喜びと、昔ながらの収穫による美味しさに引かれ、収穫の分け前がもらいたくて第一線で活躍の中年の皆さんが多忙な中を札幌から車を飛ばして参加します。

この日は雨が降っているので作業は無理なのかと思っただのですが、畑



は濡れると入れませんけれど、水田はもとも水が入っている訳で、体が濡れなければ良いのですものね。そんなことも始めて知って感激！上下雨カッパを着て田植え用の長靴を借りていざ田んぼへ。裸足の方が気持ちがいいと短パンの人もいます。

ビニールハウスの中で一〇センチメートルほどに成長したポットの苗を持ち出します。五百株ほどが一枚になっっているのでしょうか、一株ずつ抜けるようになって、機械植えに都合が良い用に改良されたものなのです。

ポットから苗をはずし、腰につける小さな籠に入れて、今年区画整理され大きくなった田んぼに向かいます。昔ながらの言い方より、水田と言った方がピッタリのピカピカの真新しい大きな四角い水田。水を流す水路は水田の高さに平行せず、昔ながらの畦よりかなり高い畦の上

にコの字の茶色い素材が埋め込まれて、草木のさえぎりもなく勢い良く流れています。こんなに沢山の水があるんだ…。世界各地稲を作る所が数々あれど、水不足で陸稲に変換している所が多いとか。一〇〇年に一度大氾濫を起こす中国大陸の黄河でさえ、乾期には河口から六〇〇キロメートルも水が干上がってしまう人や家畜が往来している写真を見たことがあります。そんな地球環境にありながらも昔どおりに水に恵まれ、水をはった水田を持つ豊かさ。また、維持すべき責務さえ感じてしまいません。飛行機で北海道に帰って来るこの時期、上空に差し掛かったとたん、一面に広がる水田にはった水の輝き。それはまさしく大地の豊かさで力強さであり、自然な美しさであり、もしこれがわが故郷でなければどんなにか羨む事だろうと思っただけです。今年二月、毛利宇宙飛行士が工



クッキングキャスター

星澤

text : Hoshizawa Satiko

幸子

ンデバーに乗り立体航空写真で、地球環境写真を撮影した訳ですが、もしこの時期だったら北海道が地球上最も豊かな大地であることが世界中で注目的になったことでしょう。

そんなことを思いながら、まだ何も生えていない畦から水田に入ります。体重が多いせいでしょうかすねまでぬかり、一歩が踏み出せずバランスを崩してしりもちを付きそう。綱渡りではありませんが両手を広げ、体を揺らしてこらえている様子を見かねて、農家の方が教えてくれました。まず、かかとを上げてから足を持ち上げますと楽にドロドロの水田から足を抜くことが出来ました。やれやれ田植えどころか歩き方さえおぼつかないのですから…。見るとするとは大違い。おーおっと危ない何処から植えはじめれば…。そこでコ口登場、等間隔に植えるためにあらかじめ目安になる印を付ける道具を引いていくのです。少し盛り上がったところに苗を二本の指で支えて土の中に立てます。植え方が悪いと倒れたり抜けたりすることは知っていましたので慎重に植えていきます。雨降りとはいえこの頃の好天気で土壌は生暖かく心地よくさえ感じるほどです。しゃがんで植えてい

ると土の匂いがします。水があるせいか畑の匂いよりまろやかでした。遠くから見ると滑らかに見えても昨年の稲の切り株や枯れ草が混ざっています。植えるべきところを先に歩いてしまうと、ぬかるみが出来て他の苗と同じに植えられません、水を濁らせるとコ口の後が何処だか見えなくて、見当で植えていくとワー大変！ぐんにやり曲がつて植えてしまっし苗の間隔も狭いし…。アーかっこ悪い、後の作業もやりずらくなりますよね。人生と同じで植えたり歩いた後はそのまま形で残るのでですね、性格は偽れません。天気の良い日ならトラクターでの植付けの様子を見ることが出来たのですが、雨の日は苗の土が落ちてしまっとか。手植えとは違い早いしキチンと真っ直ぐに植えられます。でもどんなに機械に都合の良いように大きくしてもすべて真四角には行かず、三角になった所や、始めや終わりには手作業が必要なんです。畑と同じです。

稲を植えるのは腰が痛くて大変な作業だと言うことは知っていました。が、実際にやってみるとその大変さが実感できて、植えるだけでもこれだけの苦労があるのだから、この後の草刈り、水の管理、刈り入れ、脱穀、乾燥、精米、そして炊いて八十八もの手間をかけなければ食することが出来ない大変さと、大切さ。分かっていても身を投じて体験しなければ実感できないことに気が付きました。

そこで以前から考えていた、子供に農業体験させる事の必要性を痛切に感じました。すべて分かっているつもりで大人でさえ、体験するまでは生産する大変さと、有りがたさの実感がわかないものです。畜産業も同じです。家畜の世話の大変さ、大きくするまでの時間の掛かること。私も畑で真っ黒になって働いた経験を持ちながら、毎日食べている米のことはわかっていませんでしたから。机上でどんなに食の大切さを唱えようが、何回言っても聞かせようが実感は沸かずありません。体力が余って人を傷つけたり、街でうろつるしたり、生気のないぶらぶらしている若者を何とか農地に向けることは出来ないものでしょうか。学校の授業の一環として、年何日かの農業体験が必要になるというもの。ボランティア活動がそうなりつつあ



オドリコソウ

りますが、それと同じ扱いで様々な農家に協力してもらいしっかり働いてもらうのです。受け入れ側は大変ですがその中から農業に目覚めたり、農業者の跡取りにも注目されて、後継者問題も少なくなるかもしれません。

先ごろ内政審議会「教育に関する改革案」に、教育は何と言っても「食教育」が大切。と提案させてもらいましたが、体験こそ最も必要な教育がもしれませんが、それは若い時、早い内が為になると考えます。地球環境が悪化の一途をたどる中で、北海道だけで考えると一七三パーセントも食糧自給のあるこの大地を守り、育てていく責務があることに気が付きます。それは次世代に引き継がなくてはならず、各界の人が同じテーブルについて早急に検討すべき課題と考えます。

土の匂い、それは何処にも逃げない「命の源」なのですから。